

シリーズ 私の一冊の本

看護学部 古川文子 先生

大澤信亮 著

『 神 的 批 評 』

閲覧室1階 910.26/ O74 新潮社 出版

偶然目にした本が、あれは必然の出会いだったと後になって思うことがよくあります。その一冊が本書です。四編（①宮澤賢治の暴力 ②柄谷行人論 ③私小説的労働と協働-柳田國男と神の言語 ④批評と殺生-北大路魯山人）からなり、①で倫理、②で理論、③で言葉、④で美を問う（同書二三九頁）という、この徹底した「問う」経験から生まれた本書によって、私の現実は回転させられました。

大澤は三十代の文芸批評家。宮澤賢治論の完成までに十年、二十代で賢治の「生存の暴力を見つめる詩人はいかにして絶対の慈悲を実践したか」（同書帯紙）に対峙したことになります。この一冊と出会った時、私は六十歳。徹底してどう生きるかを自分に問うたのは十九歳、本書に出会うまでは、そう思ってきました。

大澤はあとがきで言っています。「自分を問うこと。これが私の批評原理である。それは、自らの行動を反省したり、否定したりすることとは、少し違う。たとえば、人はしばしば、否定しても何一つ傷つかないことだけを都合よく自分で否定する。そうすることで何かを反省した気になる。そして忘れてしまう。それは他者を消すことであり、つまりは自分に閉じることだ。とはいえ自己批判や自己否定がまったく無意味とは思わない。少なくとも何かに出会っているからだ。しかし魂が磨かれていない。」と、「危機（critical）として訪れる、そんな他者との出会いを、性急に否定したり肯定したりするのではなく、人生に与えられた有難い恩寵として、それに相応しいかたちで受け取りたいと思った。」（同書二三六頁）と。

四編に通底するのは自分を問い続ける実践です。そのためか最終ページに至っても読み切った実感はなく、再びページを捲らせる「問う」が瞬時に立ち現われてきます。新たな危機（critical）に対峙することになるのですが。例えば、十九歳で経験した自分に対する問いは真摯に魂を磨くものだったのかと。